

---

**T h a n k y o u M y t e e n s**

黒桐梓

---

P D F 小説ネット  
Byウメ研究所  
<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

Thank you My teens

### 【コード】

N0962D

### 【作者名】

黒桐梓

### 【あらすじ】

薫はミュージシャンという夢を追って都に出て来たがいつころに足を止めてくれる人はいない。そんな薫の前に、自称サンタクロースが現れる……

Thank you My teens

Thank you My teens

(前書き)

これは『ギフト企画』参加作品です。『ギフト企画』と検索すれば他の作者の素晴らしい作品を読むことができます。

君は輝いていた

太陽のように

だから僕は君に逢いにいく

きつと知らないことばかりだけど

一つずつ埋めようよ

幸せの線を

引こうよどこまでも

ずっと

……。

イルミネーションで鮮やかに照らされた駅前に、優しげなバラードが響く。

今日はクリスマスイヴだからなのか、そこは賑やかである。にも関わらずその歌に立ち止まる者は一人二人しかいない。

駅前の広場は、何の変哲もない街灯が一本照らすだけの小さな広場だった。

ちよつとハスキーで甘い感じのする声が、地を響かせ、夜の空気を振動させている。

駅前の広場から通りを抜けて、大きなギターケースをぶら下げた先程のミュージシャンついでに月沢薫かありが、家に向かってとぼとぼと歩いている。

今度はもう電車が来ない踏み切りを待つことなく通り過ぎた。  
電車が来なくせに街はまだ元気に生きている。さながら都は凄  
い。

地元から都に出てはや二ヶ月。夢を追って出て来たはいいが、毎  
日のように見物人はいない。

まったく何のために出て来たのかと自分自身に問い掛ける。

自宅近くバス停の前でふっと立ち止まると、バス停前に設置され  
たベンチを横目でちらりと見た。青いベンチと錆びたバス停のポー  
ルが近くの街灯にぼんやりと照らし出されている。

『サリュ』

突然、誰かも分からない人物が背後から声をかけながら薫の肩に  
手を置いた。

『だ、誰！？』

咄嗟とつさに振り向く。

振り向いた先にいたのは、大きく太った体に赤い服と帽子を身に  
つけ、白い髭を蓄えた……そう。言うなればサンタクロースみたい  
な人物だった。

『やあ、わしはサンタクロースじゃよ』

『そんなインチキなサンタクロースはいません』

薫の即答に、自称サンタクロースは眉間に皺しわを寄せた。だがまた  
すぐに笑顔を創ると、真顔でこう言った。

『夢に励む少女にプレゼントをあげよう』

何を言っているのか、このおじさんは。どっか頭でもぶつけてお  
かしくなっているんだろうか、なんて薫が思っていると、何やらこ  
そこそと後ろでやっている。

『な、何してるの……』と背を向ける自称サンタクロースの背後か  
らこっそりと顔を出した。

と、突然自称サンタクロースは振り返ると、薫にリボンで締めた  
四面の箱を手渡した。

『メリークリスマス！』

怪しい。実に怪しい。

開けた瞬間に年寄りになるとか、毒霧が噴射されるとか、そんな  
ことがありそうである。

薫が迷っている間、その自称サンタクロースはにこにここと笑って  
いる。

『どうしたのか、開けないのかね』

そりゃあ普通容易に開けないだろう。いきなりひよいと渡された  
四面の箱なんて。

そのまま薫が四面箱を持って立っていると、自称サンタクロース  
はいらいらしたのか、自分でリボンを緩め箱を開けた。

その瞬間、薫は肩に下げたギターケースを置いて、箱の中に吸い  
込まれた。

『私がドラム叩くから、拓斗はギターね』

高校生の薫はバンド仲間にそう言った。そのバンド仲間、草鹿拓  
斗は頷く。

そもそも薫はドラムの担当ではない。本来彼女の担当はボーカル  
とギターであり、ドラムなどあまり叩いたこともないのだ。

それがなぜ、ドラムを叩く事にしたのかというと、元々は拓斗が  
ギターをやりたいと言いだしたからである。

もちろん薫は反対したが、拓斗がやると言っただけで聞かないため、仕  
方なくドラムを叩くのである。

間もなくライブハウスのステージが光り、赤青緑と彩られるステ  
ージ上に二人は出て行った。

ドラムの後ろにセッティングされている椅子に座り、そしてふう  
と一息。

拓斗がギターの弦を爪弾くと、ライブが始まった。

そのライブは少しぎこちないかもしれない、しかし二人はちつと

もつまらな気な顔をしてはいない。むしろここにいるミュージシャン全員が、笑顔で幸せであろう。

薫が最後の音を叩くと、二人のライブが終わりを告げた。

革ジャンを着ているためか、拓斗の体はドラムを叩く薫よりも汗だくである。

『拓斗、大丈夫？』

『はは、大丈夫』

心配する薫に対し、拓斗は笑いながら答える。

『次から私がギターだからね』

拓斗はああ、と頷いた。

気がつくくと、薫は青いベンチに座っていた。

(これは……高校生の時の……)

『気がついたかの？』

『！？』

驚いて顔を上げるが、その声の主がああの自称サンタクロースだと分かると、『なんだ』と気持ちを落ち着かせた。

『……君は何のために都にでてきたのかね？』 それは、夢を追って……と言おうとして薫ははっとした。

その気が付いた顔を見て、自称サンタクロースは頷いた。

『そう……君はあの時の気持ちも忘れていたんじゃない。確かに、夢を追うのは良いことじゃが……あの初心を忘れてはいかんのではないかの？』

今、薫が気がづいたのはまさにそのことであった。

今の自分は、コンテストに出て一刻も早いデビューをしようとしている。しかしそれは、自分を苦しめているだけで楽しいものではない。

駅前で披露している他のミュージシャンは、誰も苦しんでいない

のに、自分だけは苦しんでいるのだ。

あの楽しかった頃のように、楽しむことが自分にとっていいのではと、薫は心から思ったのだ。

『気付いたかね。子供の心を、決して忘れてはいかんぞ』

はい、と薫はゆっくりと頷いた。

薫はゆっくりと歩きだす。自称サンタクロースに心より感謝を込めて、自分の居場所へ真つすぐに。

薫が見えなくなった頃、自称サンタクロースはゆっくりと髭と赤い衣服を取った。

『頑張れよ……薫……』

駅前に薫の歌が響き渡る。先程とは違い、本当に楽しんで幸せそうに。

日付はついさつき12月25日になったばかりである。実はクリスマス、つまり今日は薫の20歳の誕生日だ。

10代最後の日を、自分の幸せな時で飾ったのだ。

ありがとう。私の十代とんだい

もう諦めないよ

空と海を愛して

どこまでも走るよ

紅と藍の道

会えてよかった

あなたに

Thank you My teens

(後書き)

今回、この作品に込めた事は『初心・子供心』です。悩んでいた、苦しんでいることがある貴方。初心に戻ってみてはいかがですか？  
ちなみにこれはYUIのThank you My teens  
という歌を元に、クリスマス風にしたものです。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0962d/>

---

Thank you My teens

2008年11月7日06時51分発行